

## 第1回 伊平屋村産業経済活性化協議会 議事録（要旨）

会長 それではこれより、第1回伊平屋村産業経済活性化協議会を開催いたします。  
本日の議事は、お手元の次第にあるとおりとなっております。

会長 早速ですが、議題1「伊平屋村の産業経済等の現状」について、事務局から説明をお願いします。  
太田 資料3に基づき説明（詳細は割愛）

会長 ありがとうございます。

続いて、議題2「伊平屋村における域内循環の現状」について、本日は、内閣府沖縄総合事務局経済産業部企画振興課から、幸喜綾子地域振興統計係長及び RESAS(リーサス)普及活用支援調査員の稲福政志様にお越しいただいておりますので、稲福様よりご説明をお願いしたいと思います。

稲福様、よろしく願いいたします。

稲福 ご紹介いただきました稲福でございます。

（「RESAS とは？」「RESAS 普及活動状況の説明」等に関する部分は割愛）

稲福 地域経済と所得の関係については、よくコップ(経済)とその中の水(所得)に例えることがあります。  
(図1)

ここで、経済を拡大しよう、あるいは、所得を増やそうとすれば、考えられることは次の3つです。

一つ目は、コップに水を注ぐことで水の量(所得)を増やすというものです。経済施策的にいえば、ここにあるように地域の外から財(外貨)を獲得したり、観光客を呼び込んで域内で消費してもらうという施策です。

二つ目は、コップそのものを大きくすることです。港湾を整備して一度にたくさんの人が島に来ることができるようになる、企業を誘致するといった施策です。

三つ目は、コップに開いた穴を塞ぐ施策です。沖縄には「ザル経済」という言葉がありますが、コップにいくら水を注いでも、底に穴が開いていたのでは水はたまりません。

経済(コップ)に残る所得(水)を溜める・増やすための施策

(図1)

### ① 水を注ぐ施策

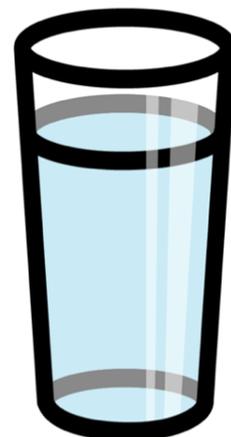
観光客を呼び込んだり、県産品の販路を県外に求めたり、政府から補助金を獲得するなど

### ② 容量を大きくする施策

経済の規模を大きくするために、空港・港湾の機能強化や地場産業の育成、企業や工場の誘致など

### ③ 穴を塞ぐ施策

県内需要の高い商品・サービスを県内企業が提供できるようにすることで域内自給率を高める



出典:「沖縄における経済循環の構造把握調査分析 報告書」をもとに作成  
([https://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chosei/seido/documents/r1\\_keizaizyunkan.pdf](https://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chosei/seido/documents/r1_keizaizyunkan.pdf))

この3つの施策を頭に入れながら伊平屋村の経済循環がどういう状況になっているかということをご一緒に見ていきたいと思います。

これからご説明する RESAS 分析は、基となっているデータが 2018 年のものですので、若干データが古いです。従いまして、現状では状況が若干変わっているかもしれません。

RESAS の不得意な部分でもあるのですが、タイムラグが出てくるということで、その辺りをお含み置きのうえお聞きいただければ幸いです。

図2は RESAS で伊平屋村の地域経済循環を出した図になります。

左上の黄色い四角で囲っている部分に「地域経済循環率 28.8%」とありますが、これが伊平屋村の地域経済循環率です。この数字は、沖縄県下 41 市町村の中で最下位となっています。

地域経済循環率は、生産を分配で割ってはいじき出します。なので、この値が 100%前後の値になっている場合は、生産と分配のバランスが取れている状態ということになります。

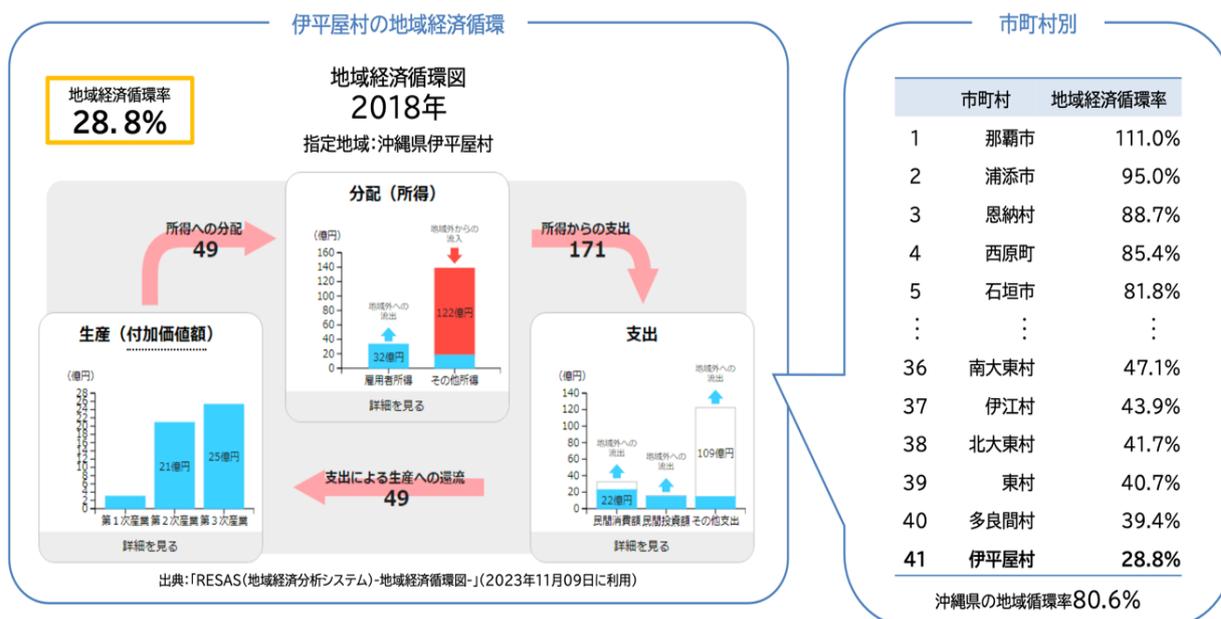
この数字が示すのは、所得(分配)がどの程度地域内に還流しているかということです。

この数字が 100%を超えるという状態は、域内で生み出した付加価値額が域内の所得よりも大きいということです。つまり、域内で生み出した付加価値額が分配の際に域外に流出しているということです。那覇市がそれに該当しますが、那覇市の場合は、周辺市町村から働きに来て生産活動を行い、所得は住んでいる市町村に計上されることになる(所得の流出)ことから、地域経済循環率が 100%を超えているということです。

逆に、伊平屋村のようにこの数字が低い場合は、域内で生み出した付加価値額より所得(分配)が多いということです。村外で働いている方の雇用者所得とか、補助金等の財政移転に大きく依存しているということです。伊平屋村の場合ですと、離島村ということでもあるので、村外で働いている方はあまり多くはいらっしゃらないと思いますので、おそらく、国や県などの補助金等の再分配に大きく依存して

## 伊平屋村の「地域経済循環率」 | RESAS:地域経済循環マップ> 地域経済循環図

(図2)



いるものと思われます。

次に、生産、分配、支出をもう少し詳しく見てまいりましょう。(図3)

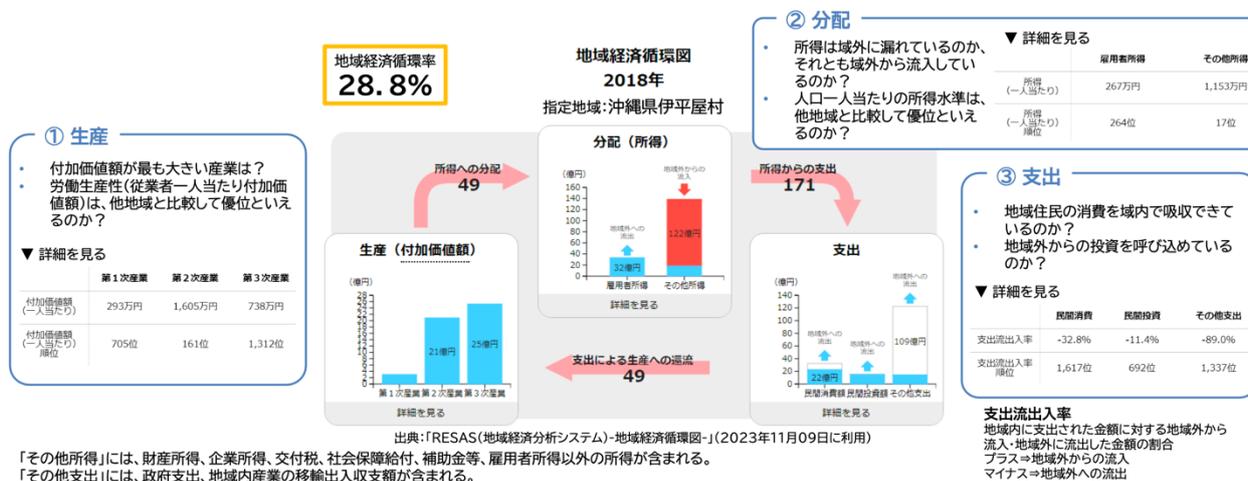
伊平屋村の生産では、第3次産業が25億円、第2次産業が21億円を稼ぎ出しているという結果となつていますが、従業者一人あたりの付加価値額で見ると、第2次産業が1605万円とダントツの数字となっております。建設業の比重が大きいと思いますが、或いは製糖業(黒糖)も影響しているかもしれません。

## 地域経済循環図

(データ出所:環境省「地域産業連関表」「地域経済計算」(株式会社価値総合研究所(日本政策投資銀行グループ)受託作成)

(図3)

- 都道府県・市区町村単位で、地域のお金の流れを生産(付加価値額)、分配(所得)、支出の三段階で「見える化」することで、地域経済の全体像と、各段階におけるお金の流出・流入の状況を把握することができるため、地域の付加価値額を増やし、地域経済の好循環を実現する上で改善すべきポイントを検討することができる。
- 地域経済の自立度を測る地域経済循環率(生産(付加価値額)÷分配(所得)により算出)を把握することも可能。



分配(所得)について見てみますと、雇用者所得、これは離島ということもあって域外への流出はほとんどありません。その他所得で122億円ほどの流入が見られますが、これはほとんどが、補助金、交付税、社会保障給付などの財政移転だと思われます。

最後に支出です。支出の流出率、すなわち地域内に支出された金額に対する地域外から流入・地域外に流出した金額の割合を見てみますと、民間消費で32.8%の流出、民間投資でも11.4%の流出、その他支出で89%の流出となっており、村民の消費を域内で吸収できていない実態が浮かび上がってきます。

少し RESAS から離れますが、環境省が提供している地域経済循環分析というものがあります。

こちらは、RESAS よりももう少し細かく地域経済循環の分析ができます。例えば、分配面については、「その他所得」を「民間」と「公共」に分解、「民間」はさらに「本社・親会社等への流入」、「公共」は財政移転の状況まで把握できます。

ここから少し、この地域経済循環分析を基に伊平屋村の状況を見ていきたいと思います。(図4)

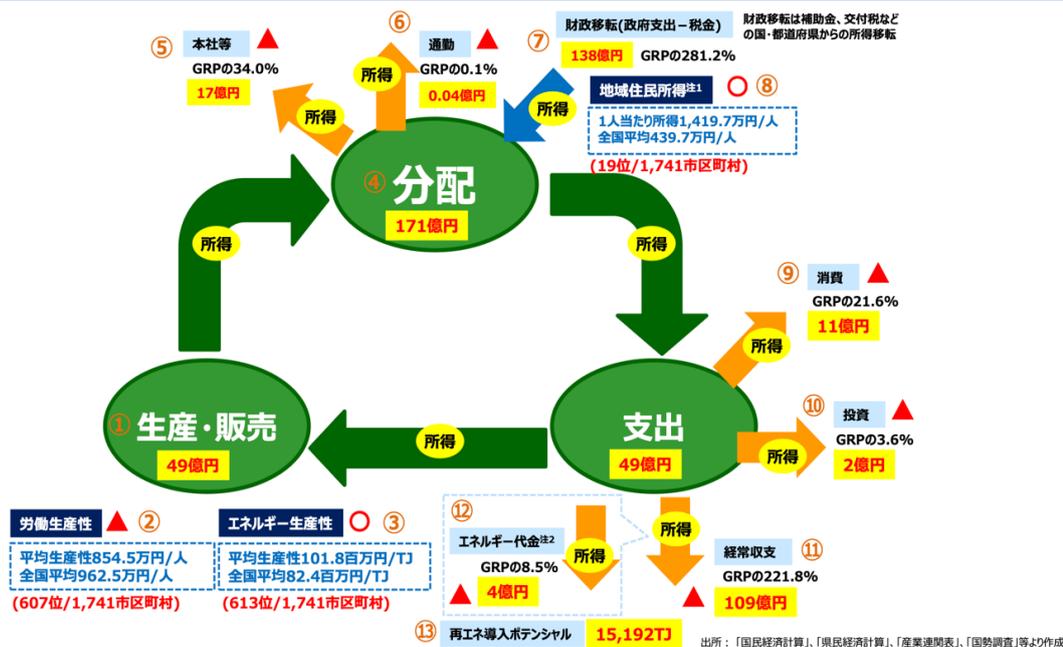
図4の緑色の矢印は所得の循環を表しています。オレンジの矢印は所得の「流出」を表しています。

伊平屋村で生み出された付加価値額は2018年で49億円、一人あたり労働生産性は、全国平均962.5万円を下回る854.5万円となっています。

次に分配を見てみると、全体では171億円となっています。詳しく見ていくと、民間所得では本社等への所得の流出が17億円となっています。これは島外資本による公共工事等の受注などによるものと思われる。伊平屋村で生み出された付加価値額は49億円でしたので、その34%くらいが村外に流出しているということがわかります。通勤による所得の流出は0.04億円、これは離島ゆえに島外からの通勤者がほとんどいないというのが要因です。

## 地域の所得循環構造【伊平屋村】

(図4)



一方で、財政移転は138億円の流入となっています。これは域内付加価値額49億円の3倍近い数字となっています。

結果、一人当たりの分配額は1419.7万円で、全国平均を大きく上回っています。

最後に支出についてです。

消費の流出が11億円となっています。伊平屋村の付加価値額の2割超の数字になります。その他、投資も2億円の流出で、経常収支は109億円のマイナスです。

伊平屋村の状況だけを見てもなかなか状況把握が難しいと思いますので、少し近隣の市町村の状況を見てみたいと思います。(図5)

## 地域の所得循環構造【伊江村】

(図5)

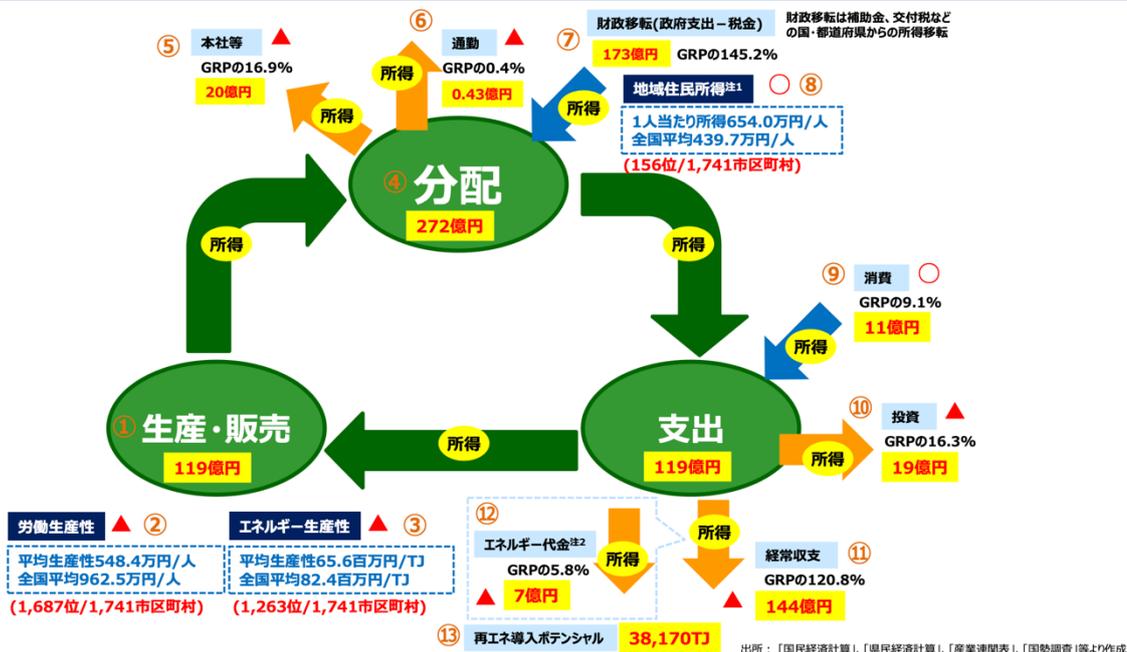


図5は、伊江村の所得循環構造分析結果です。

伊平屋村とは、人口、事業所数、財政等、規模の差などもありますので、単純比較はできませんが、所得循環構造で伊平屋村と大きく異なっているのは、支出の消費の部分です。こちらは先ほどの伊平屋村では村外流出が11億円となっていました、伊江村は逆に11億円の流入超となっています。つまり、伊江村では、11億円の消費の流入がみられるということです。これはどういうことかということ、村外から、例えば観光で来られた方が伊江島内でお金を落としているということです。

ここで売上分析を見ていきたいと思います。

我々は、地域の中で、生産した財・サービスを地域内外に販売して、所得を獲得しているわけですが、生産額が大きい産業は地域の強みの産業と言えるわけです。

図6をご覧ください。

ここでも伊平屋村と伊江村を比較して掲載しております。

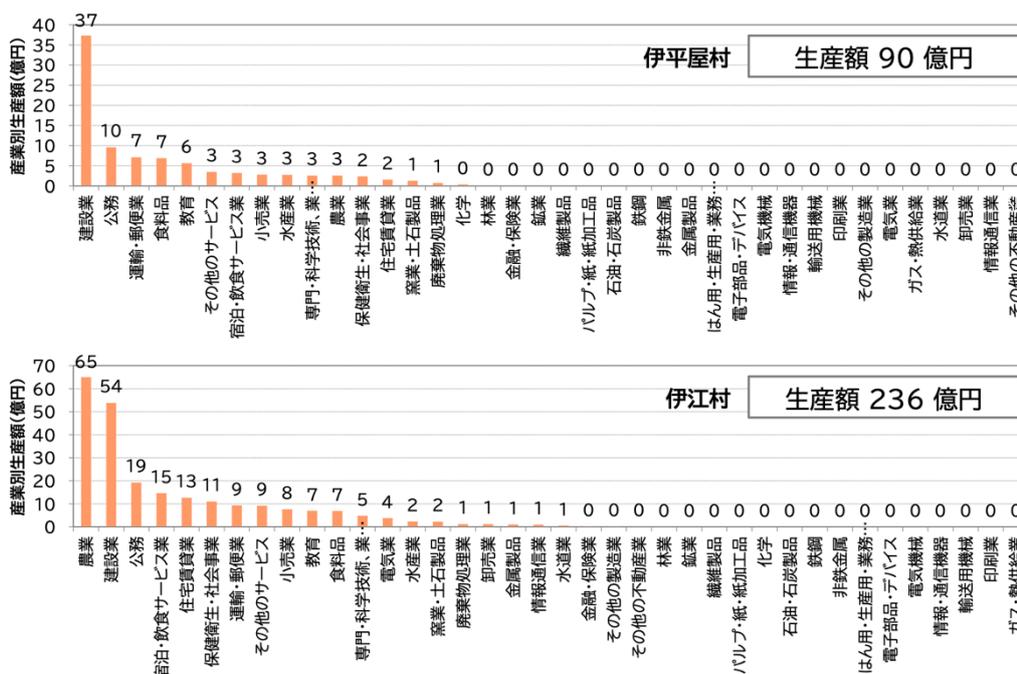
売上、つまり生産額が大きい産業は、伊平屋村の場合は、建設業、次いで公務、運輸郵便業、食料品と続きます。

他方、伊江村の場合は、農業、建設業、公務、宿泊飲食サービス業と続きます。

ただ、生産額の大小だけでは、地域の特徴を把握するのは難しいので、地域の産業別の生産額のシェアと全国の産業別の生産額のシェアを比較し、貿易を考慮した係数である「修正特化係数」で伊平屋村の産業構造を見てみましょう。(図7)

## (1) 地域の中で規模の大きい産業は何か①: 産業別生産額

(図6)

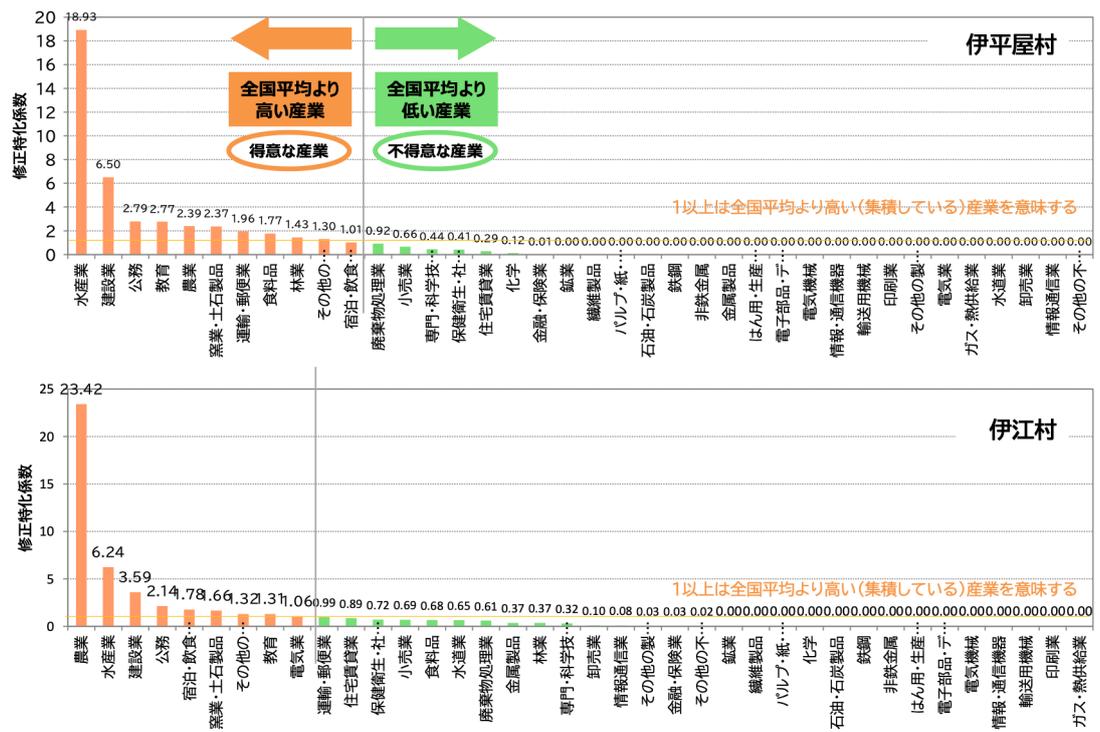


「地域経済循環分析自動作成ツール」(環境省) (<http://chiikijunkan.env.go.jp/manabu/bunseki/>)をもとに作成

修正特化係数が高い産業は、地域において、全国平均と比較して生産・販売がし易い状況にあり、一般的には地域がこの得意産業を生かして、産業構造を構築していくことが重要だと言われています。

## (2) 地域の中で得意な産業は何か：産業別修正特化係数

(図7)



「地域経済循環分析自動作成ツール」(環境省) (<http://chiikijunkan.env.go.jp/manabu/bunseki/>)をもとに作成

これを見ると伊平屋村の場合は水産業が得意な産業として上がっています。伊平屋村において水産業は、全国平均と比較して生産・販売がし易い状況にあるとの結果が出ております。統計データから見る限りにおいては、水産業を中心にその加工品等を製造するなどの地域産業構造の構築が重要であるのではないかとこのような結果がこちらのグラフから読み取れます。

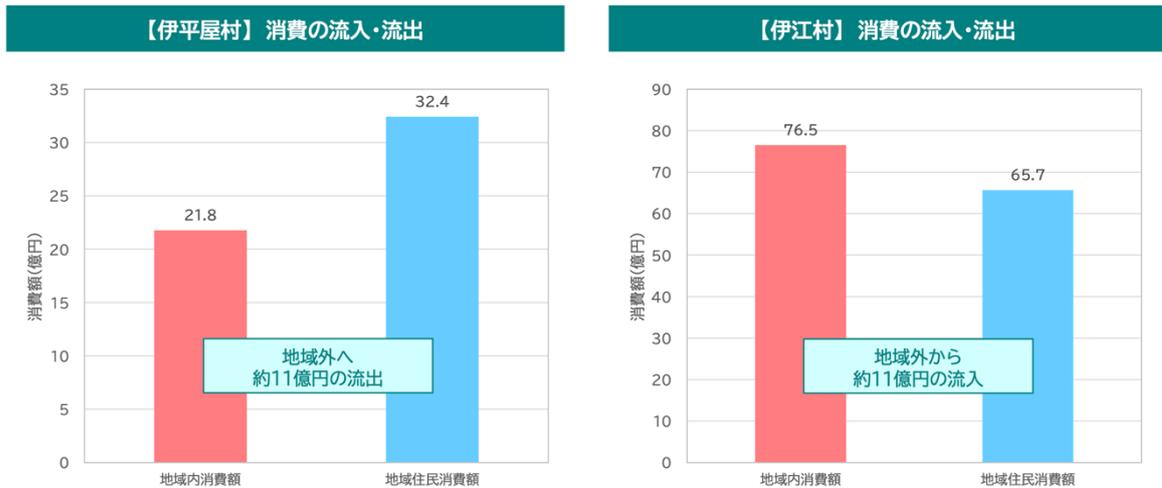
伊江村の場合はダントツで農業の割合が高いです。サトウキビはもちろんですが、島らっきょうであったり、小麦であったり、落花生であったり、様々特産品がありますから、そこら辺が強みなのかなと思います。

最後に消費です。(図8)

伊平屋村と伊江村の違いが出たところなのでこちら(図8)を見ていきますが、赤と青の棒グラフ、伊平屋村のグラフを見ると地域内消費額よりも地域住民消費額の方が大きい数字となっています。これはつまり、地域に落ちている消費額が地域の住民が消費した額より11億円少ないということです。地域住民が11億円分地域外で消費をしているということがこのグラフからわかります。

## (1)住民の所得が地域内で消費されているか

(図8)



伊江村と比べてみると、伊江村の場合、地域住民消費額よりも地域内消費額が多くなっていますので、消費所得が流入しているということが分かります。

以上、駆け足になりましたが、RESAS と環境省が提供している地域分析システムで特徴的なデータを抜粋して分析、報告させていただきました。

しかし、これはあくまでデータ、かつ、そのデータが2018年と少し古いので、現況とは若干状況が変わっているということもあろうかと思えます。

本日の分析は、あくまでも統計上のものです。実際に地域活性化を進めていく上では、伊平屋村に住んでいる皆さんや事業活動を行っている事業者の皆さんの生産、消費の実態といった定性的な評価を組み合わせると、より実情に則した施策展開ができるのではないかと考えています。私からのご報告は以上でございます。ご静聴ありがとうございました。

### (意見交換)

- 会長 それではこれまでの説明について、フリーに意見交換をしたいと思えます。どなたからでもご自由に発言ください。
- 木村 ありがとうございます。非常に面白い分析だと思います。  
図8に関しての質問です。地域内消費額と地域住民消費額の差額11億円の流出の内訳というのは、出ていないのでしょうか。
- 稲福 残念ながらその内訳までは、わかりません。
- 木村 この11億がどういった内訳になっているのかということがわかれば、その部分を域内で製造できるとか、そうした対応、改善ができるのかな、と思いました。ありがとうございます。
- 石原 関連しますが、伊江村では域内消費が11億多いということですが、これは観光客が伊江島内で消費した分が含まれているから11億多いという結果になっているんですか。
- 稲福 そうですね。伊江島に落ちているお金が、地域住民が落としているお金よりも多いということなので、住民以外の方が地域に11億円落としているということが想定されます。

ただ、これは地域住民が全て域内で消費しているということではなくて、地域住民が伊江島以外で消費した分(地域住民による所得の域外流出)を加味してもなお 11 億円余分に伊江島にお金が落ちているということです。従って、実際には、11 億円を大きく上回る額の消費が伊江村民以外の方によってなされているということになるかと思えます。

是枝 図4の分配のところで、地域住民所得が一人あたり 1419 万円となっています。この数字には非常にびっくりしているのですが、これに関して、財政移転が 138 億円となっている。これはつまり補助金とか、交付税とか、一括交付金とかが 138 億円この島に入っている。島で生み出された付加価値額 49 億円に加えて、一括交付金とかの財政移転 138 億円を含めるとそうなるという考え方でよろしいですか。

稲福 はい、そうです。そこも含めての一人当たり所得ということですので全国 19 番目の数字になっていると。

是枝 所得の 3 倍の交付金とかが入っている。これって結構すごいことだと思って、自分の理解が当たっているのかというところでの質問でした。ありがとうございます。

是枝 これは 2018 年のデータということですが、毎年こんな感じなんでしょうか。

稲福 比較をしてみると、この年が結構はね上がっていました。

是枝 なんか、製糖工場とか、そういった特殊要因で上がっている、とかいう可能性があるということですか。

稲福 その可能性があります。

会長 時系列でみられたら本当良かったんですが。そういう意味では数字と定性的なデータを入れ込んでいけばなんとなくわかるということですね。

太田 大切なのは、結局(金額の)多寡はあるんですが所得移転がなければ、島だけでは当然経済は成り立たないということです。補助事業を多く取ると所得移転が起こるわけですから、当然経済は活性化します。でも、いつまでも国からの財政移転だけに頼っていたんでは、先々怪しくなっちゃうんで、なんとか民間で、例えば是枝さんのところの商品が外でもっと売れるとか、あるいはいろんな商品、特産品を作って外貨を稼ぐ。そういうことをやってここ(消費の流出)を埋めていく、それが本来の美しい経済の姿ということかなと思います。

是枝 11 億円に関して話を伺いたいと思うんですが、消費が外に流出している。これは買い物だとかそういうことだろうとの仮説でしたが、(本協議会は)この 11 億円が島内で循環できればいいんじゃないかというような会議でもあったりするという理解でいいですか。

太田 仰る通り。一つには、島の人が「もっと島のものを買きましょうよ」ということ。つまり「地産地消」を推進していくこと。島で手に入るものは可能な限り島で手に入れましょう。というのが一点。もう一つは、観光客にもっと島の商品を消費してもらうということ。先ほどの伊江島のように、入域客の消費が活発になるような状況を如何にして作り出すかということかなと思います。

その両面について「どうすればそれが実現するのか」ということをこの協議会で議論して、形につなげていけたらいいのかな、と思っています。

是枝 争点は 2 つあって、域内の人にもっと島のものを買ってもらう方策をどうするのか、ということ。もう一つは、これから新商品開発をしたりして、如何に村外の人たちに対して物を売って外貨を稼いでいくか、ということ。それによってマイナス 11 億円をプラスに変換していく。プラス 11 億円、22 億円にしていく。そういう 2 つの観点で話を進めるというような理解でいいでしょうか。

会長 そういうことです。

ただ、今日は初めてなので、現状を踏まえた上で、皆さんが思っていること、可能性などをざっくばらんに話し合ってもらえればいいかなと思います。

- 会長 伊江村は、結局、農産品の販売のみならず、付加価値をつけたさまざまな商品、サービスを開発して、それを観光客に販売したり、インターネット等で販売している。
- 伊平屋村であればもずくですか。もずくを単に作って売ることではなくて、それを加工した島の特産品を作って、島の名物として売っていく。そういった付加価値をつけて外貨を稼ぐ方策についても議論できれば。
- 石原 伊江島を参考に出しているからすごく分かりやすい。
- 今から 13、4年ぐらい前に、伊江島の方から依頼を受けて「イカ墨ジュシー」という商品を作ったことがあります。あれを作る時に、民泊の方などを集めて意見を聞いたことがありました。そこで出たのは、まず 1 番目に「伊江島の原料」であること、2 つ目に「沖縄らしいもの」であること、3 つ目に「会話が弾むもの」という話を住民がやっていたわけです。あの時、僕が感じたのは、子供たちに何を食べさせようか、お土産に何を持たせようか、ということで民泊の方が困っていて、そういう商品がないんだな、と。だからこそそういう商品を作りたいんだな、と。そこから作ったのが「イカ墨ジュシー」という商品なんです。
- そこに行くにあたっては、伊江島が持つ風土であったり、伊平屋島が持つ風土であったりとか、そういうところを多少変えていくというかね。そういうこともチャレンジしないと簡単にはできないだろうという風に個人的に思いました。
- 会長 伊平屋村らしさとは何か、ということですね。皆さん自身が思っていることと、多分、お客さんとしてくる方達が伊平屋村って何かというような。
- 木村 RESAS のもう一つ面白いのが「産業別修正特化係数」という整理の仕方。普通に統計で見ると、水産業ってそんなに高くはないんだけど、この係数で整理すると、全国の平均より高い産業なんだよ、という結果が出ている。今お話が出たように我々が持っている、いわゆる主観的な強みと言うこともあれば、これどっちかと言うと数字的な強みということがあるので、2 つの側面で考えていくということが大事ななと思っている。
- 質問なんですけど、いろんな地域の分析をした中で、この部分に関してはやっぱり全国平均よりも高いという結果が出ているので、それを聞いた自治体が何か具体的なアクションを起こしたとかとか、そういった事例ってありますか。
- 稲福 事例は今持ち合わせていないのですが、水産業が高いというのが出たので調べられる限りで伊平屋村の水産業はどうなっているのかということ調べてみました。そうしたら、5次総計の産業別就業者数の推移というグラフで、平成 2 年と令和 2 年を比べた場合、農業従事者が半分ぐらいに減っている(188 人 → 90 人)のに対して、漁業従事者は平成 2 年が 35 名だったのに対し、令和 2 年は 41 人と増加していました。(配布資料「第 5 次 伊平屋村総合計画」書の 11 頁)
- このデータを見た時に、すごくいい方向に向かっているなど。そういう取り組みをやられているのかなと思ったのですが、これ、実際にそうした取組を行った結果ということでしょうか。
- 新垣 確かに、後継者、2 世たちが戻ってきて、かなり若い人が増えてきた。高齢者(熟練者)は減っていますが、それを補うだけの生産力もつけているというところで、今はむしろ、生産するよりも販売力、我々の力の弱さが浮き彫りになっている。
- 石原 伊平屋漁協は、組合長を中心に、関東のコープデリさんとか、日生協さんと太いパイプを作っている。このことも僕は大きいと思っている。いろんな地域の漁協とかを知っていますが、そういうパイプを持っている漁協は意外と少ないです。伊平屋漁協はそれを持っていますから。大消費地の生協とキャッチボールをしているんですね。当然そこの関係を作るためには、行政であったり、皆さんが相当ご苦労さ

れているのはわかるんですよ。そこがすごく大きいのかなと思いますし、それがこういう形で数字として現れているのかなと思います。

新垣 コープデリさんとはもう14年ぐらいのお付き合いになります。デリさんももずく売り上げから、島の環境維持のための基金を設置して毎年寄付をいただいています。先月、約170万円の贈呈式がありました。トータルではかなりの金額を島の環境維持のために寄贈いただいています。

是枝 コープの通販で、私たちも週に1回宅配が届くんですけど、そこに基本的には伊平屋のもずく3パッケージとかが毎回掲載されていて、かなりの頻度で出てると思います。

石原 以前、経営的にかなり厳しくなった漁協-他の離島です-があったんですが、それが日本生協連を通じて損益改善へとつながりました。2年で漁協の経営状況がガラッと変わった。

この時に思ったのは信頼出来るパートナーとキャッチボールができるというのは、すごいことなんだな、と。運賃がかかるとか、そういう負の側面を抱えている離島だからこそ、きちんと繋がることによって販売とかが回るんだなあということを感じたことがあります。売り先がある、信頼できるパートナーがいる、そことキャッチボールができるというのは、こういうところに強みが発揮できるんだなと、感じました。

是枝 自分が聞いた話によると、コロナでもずくが売れなくなっている、と。これは非常に大きな問題で、海人には、若い子たちもいっぱいいるし、頑張っているんですよ。ただ、売り先がない、今、もずくが非常に余っている状況で、来年から生産制限がかかるというような話もちらっと聞きました。コープさんだけではもう成り立っていかない、そういう危機的状況にあるのかな、と。だから今この表では従事者も増えて生産力も上がってというようなデータにはなっていますけども、来年どうするか、再来年どうするかということ考えた場合、海人には非常に厳しい現状にある。

金城 若い海人たちと話をするんですけど、これだけ生産が上がって、作っても作っても収入が上がっていかない。はたから見たらおかしい話で、これだけ作れて出せているのになんで上がらないのかな、ということ自分たちでも思うことがあります。

会長 もずくは生ですか。

新垣 塩(塩蔵処理)が多いです。

会長 さっきの伊江島であれば色々商品開発などに取り組まれているじゃないですか。そういうことのトライみたいなことは。

是枝 多分色々やってますよね。

新垣 いろいろ商品開発をやっています。でもなかなか販売が...

是枝 港のターミナルの中に「ヴィラージュ」という売店があります。そこを覗いてみると伊平屋漁協が独自に開発した商品がずらっと並んでいます。他の離島に比べてかなり商品数も多いと思います。一番の売れ筋はもずく麺ですよ。北海道の小麦と塩を使ってないもずくだけのものが結構人気があって。ただ相当、数は出していると思うんですけど、それでも全然バランスが取れてないというか。

会長 売り方が悪いというか、消費者が知らないんですよ、商品情報を。せっかいいものを作っているのにその情報が消費者にきちんと届いていないから、アピールができない。入手するのが困難というのはいいと思うんですけど。せっかいいモノがあるんだったらこれをどう外に出していくのか、発信していくのか、その辺が課題であるのではないかと思います。

石原 今実際、島内で生産されるもずくは、漁協にどのくらい上がっているんですか。

新垣 70%ぐらいですね。

石原 以前は漁協に集まらなくて、大変だったということがあったじゃないですか。こういう話って地域に行くとしょっちゅう起こるんですよ。地理的なハンディーを持っているからこそまとまらなきゃいけないのに、

まとまらないでブローカーに出して行くという。長い目で見たらブローカーに出すということは発展しないんですよ。ただ、残念ながら、目先の金を積まれるとどうしても出してしまうという。本来であれば、みんなで力を合わせて、漁協にモノを集めて、漁協が営業して販路を拡大して、消費拡大につなげる、というのがあるべき姿なんですけど、なかなかそこに持っていけないのも実は沖縄の現状なんです。

新垣 ちょっと余談になりますが、もう40年来ずっとそれなんです。特にうちの場合は離島経費もかさむので、価格的にも他より若干落ちるんです。他の地域ですと水揚げの10%とかを(手数料として)取るんですが、うちはこれを全く取らないんですよ。漁協としてはかなり厳しいのですが、それでもやっぱり(他地域と)価格差が出てくる。

木村 物流コストがかかってしまったりとか。

新垣 そのコストとは別にですね。仮に100トン揚げるとしたらその100トン全部漁協が買うんです。通常のところだと、(手数料として10%取れば)90トンなんですけど、価格差はあるんだけど、そこで少し埋め合わせをしている。そこら辺生産者はあまり見えてない部分です。

真栄田 水産業は、全国より高い産業というお話でした。伊江島は農業が高いという。島として、主軸をどこに持っていくか。この会議で、方向性としては「じゃ 水産業で行こう」と、そういうことを決めてもいいかな、と。

村長 伊江島については、畜産もちろんそうなんですけど、花卉、葉タバコ、きび、らっきょう、落花生、麦も作ってる、芋も作っている。いろんな品目があるんですね。らっきょうなんかだと昨今、異常に高騰していて、もう伊江島外には一切出さないというような政策まで打ち出してしっかりやっている。また、伊江島の畜産がなんですごいかというと、血統登録牛の遺伝子を入れているから、牛の価格が伊平屋村と全然違うんですよ。いい遺伝子を持つ受精卵は確実に着床する。通常の人工受精だとつかなかったりするし、なかなかいいのも出てこない。こういう風にして生産農家に分けていく。こういうことをやって少しでも単価が高く市場で勝負ができるようなことをしていかなかったら、畜産農家の生産力も上がっていかない。

伊平屋村の場合は、サトウキビがメインで、米も作っているけれどもだんだん衰退している、牛も少ないという状況の中で、JAが抱えている一番の問題は、黒糖がだぶついている、在庫を抱えているということです。それじゃあ、サトウキビをどれだけ作ればいいのか。これだけ在庫を抱えているのに、5千トン作らなきゃならないのか。工場の能力は5千トンあるので、50トンとか100トンぐらいでは経営できない。結局5千トンにするのか、6千トンにするのか。また、牛は今非常に低迷しているけども、生産性を上げるためには牛も増やさなきゃいけない。けど、伊平屋村は牧草地も少ないから、なかなか牛が増やせない。ここで、サトウキビの単収を上げるような施策を打って単収を上げていけば、耕作面積を小さくできる。余った土地に牧草を植えるということをやっていけば畜産も上がっていく。サトウキビだって生産性が向上する。そういったことも議論しなければならない。農業については、みんな考えていかなきゃいけない。(後継者不足で)農業が成り立たない時代がいつか来るのではないか、という懸念もある。だから、やっぱりいいものを作って、どうやったら高くで売れるかという方法も議論していかないといけない。伊江島みたいに農業に力を入れて、売れるものを作っていく努力が必要だ。

伊豆味 原料をそのまま島外に出す。こんなもったいないことはない。今、村長が仰ったように、農業人口が減っていく。その打開策として、製造業をもっと増やして、農水産品を加工して、島外に出す、或いは、地元で消費するという形を作って、農業所得の向上を図っていくというのが一つ。もう一点は、雇用を作り出すということ。若い人だけじゃなくて、年配者の雇用も作り出していかなきゃいけない。

製造業もですね、大きな会社とかではなくて、個人事業でいいんです。私は今、三枚肉入りの油味噌を作っています。これまでは島外産原料を使っていたんですが、例えば、その原料として伊平屋産黒糖を

使うだけで価値観が違って来ます。少しでもいいから伊平屋島産原料を使うと大きなアピールになる。ですから、小さくてもいい、伊平屋の素材を使って商品開発などに取り組んでいける施設、個人でモノを作れる施設などを持って(整備して)、付加価値をつけていく。そうすることにより、若い人に仕事の選択肢を増やしてあげる。伊平屋村の将来に希望を持てるようなそうした土台を作るのが我々の役割だと思えます。

会長 サトウキビは重労働と聞いている。伊平屋島で何を作るか。今、沖縄全体で見ても、いろんな農産物が栽培されているので、その中から魅力的な作物ということで考えてもいいんじゃないでしょうか。

是枝 伊豆味委員がおっしゃる通り、伊平屋村には「小さな事業者」というのがすごく必要じゃないのかということも私も思っていました。

あと、雇用に関して。

懸念されることは、今、どこでもそうなんです、人がいないということ。そうなれば、今いる人をいかに活かしていくかということにならざるを得ない。例えば、子育て中のお母さん方が安心して働きに出られるような施策、保育所の待機児童—ようやく今みんな入れるようになったようですが一問題とか、そういった部分をしっかり取り組んでいただきたいと思えます。

保育所問題以外にも、公園の整備とか。お母さん方から大きく声として挙がっています。小さなお子さんがいらっしゃるご家庭などは、土日遊びに行くところが島にないので本島の公園に行くとか、よくあるんです。本島に遊びに行ったら、ついでに、スーパーで買い物も済ませてしまう。

ですから、島内に子供が遊べる屋根付きの、小さくてもいいのでアトラクションを作ってもらって、お母さん方がゆんたくできるような場所ができて、併せて保育所の環境とかが整っていれば、週末島で過ごす家族がもっと増えると思うし、そうすると自然と島で買い物をします。伊平屋島は意外とスーパーも揃っていて、一通り、暮らせるシステム(基盤)は整っていると思うので、あとはお母さん方が集える場所みたいなところを早急に作ってもらいたいと、昔から言い続けているのです。

それから、少し話がそれますが、今、島の中にはスーパーなども比較的揃っているという話をしましたが、そんな中でも意外と「島のものが買えない」という問題があります。かといってこれ以上売店を増やすというのも現実的ではありませんので、一案としてキッチンカー、移動販売のようなものに島産の海産物や野菜などを乗っけて売り歩く。これから先、買い物に出かけられない、いわゆる買い物難民とかも増えてくると思いますので、そういう方達にも対応できる持続可能な新しいスタイルの販売方法とかそういうものを取り入れてもいいかな、と思えます。

石原 先ほど伊豆味委員が言われたように、如何に加工するか、ということも絶対やるべきだと僕は思います。採るだけ、出すだけ、というのは 1/10 経済にしかありません。島でどれだけ付加価値をつけるか、10 倍の価値をつけて商品を出すことによってそこから生まれる経済の回り方があるわけです。

それと、今日の方がどういう場であるのかということも僕なりに感じたのは、地域の方々の根底に脈々と流れているものの見方、考え方をみんながシェア(共有)する場なのかな、と思っています。その共通理解を促進するためにもずくを事例として出して議論したということだろうと。私のこれまでの経験からすれば、そういう(ものの見方、考え方をみんながシェアしている)地域は成功し易いんだけど、そうでないところは、打ち上げ花火で終わってしまう。だから、将来に向けてしっかりと情報交換、意見交換を行なってもものの見方、考え方を共有していく、そういう議論の場になればいいなと思っています。

会長 仲川委員、何かご意見等ございませんか。

仲川 私はやっぱり「食」も大事だと思います。伊平屋島は小さい島だけど、幸いなことに山もある、海もある。そしてそれらの幸も豊富です。島のものは安心安全ということもあって、自分もそれを意識して今、店を出しているんですが、島のものが手に入らないことも多い。うちは県から「おきなわ食材の店」という看

板をいただいているのですが、島では、特に野菜類が年間を通じて安定的に仕入れられなくて、月に一回程度、名護市のファーマーズマーケットに出掛けて、沖縄県産品を買うようにしています。それでも時期によっては県外品も多いです。

最近、県外の方は地域の食材に興味がある人が多くて、そういう方がよく当店にいらっやいます。島の特産のもずくスープとか、あおさスープとか、とっても喜ばれます。

また、それとは別に、本島から伊平屋へ来た方が、新鮮な野菜や魚が手に入らないという話をされてきました。

ですから、魚も、野菜とかも、島のものが島で気軽に手に入れられればもっといういな、と思います。そこら辺が充実したら本当に住みやすい島で、今から生まれてくる子供たちに安心安全な食材をあげられるのにな、というのがあって、自分はこれが一番大きいですね。

他には、お年寄りの買い物の問題とかもこれから出てくると思うので、巡回して販売するというのはいいのかなとお話聞いて思いました。

会長 ありがとうございます。安里委員いかがでしょうか。

安里 今、民泊で伊平屋のもので食事を出そうということをやっているんですけども、野菜(島産品)不足は悩みの種です。そんな中、漁協のもずく麺は必ず一食出してあげるという方針にしていますが、これとて漁協に注文すれば必ず手に入るんですが、普段買おうと思ってもなかなかスーパーでは手に入らないという悩みがあって、そこら辺り少し改善してもらえないかという気もします。

島で比較的良好と取れるとしたら、冬瓜とか、かぼちゃとかいうのは年中安定して取れるのかなという感じがしていますが、キャベツとかそういうのはどうしても外から入ってくる。また、野菜を作ってスーパーに出しても、島の方がなかなか買わない、そんな習性があるんですよ。出しても島外から来たものを買うという。私も自分でかぼちゃを作ったり、冬瓜を作ったりして出すんですけど、冬瓜なんかはいいものを出してもなかなか売れない。他から来たものを買うという状況があったりする。また、海産物もなかなか手に入らない。前回の民泊で、甥っ子がその日の朝取った魚が手に入ったもんですから、それを出してあげたらすごく喜ばれました。また、それを解体している現場も子供たちに見せたら子供達も感激して、こういう新鮮なものを食べられるという、これも民泊の一つの売りなのかなという気がするんですが、なかなかそれが流通してないというのが悩ましい。そこら辺を打破できないものかなという思いもあります。

是枝 魚に関して若い海人から聞いた話では、島尻漁港の施設が出来上がると、あそこで週に何回かセリをしようかな、みたいな話があって、獲れたての魚をあそこでさばいて販売するみたいなこともやっていきたいというような話をちらっと聞きました

安里 すごくいいと思います。解体するのを見るだけでも…

是枝 民泊の日に合わせてもらって(セリを開催するとか)。

佐久川 野菜とか、家庭菜園で作っている方がそれなりにいらっやるとするのは承知していますが、そういった野菜などは自家消費として作っているとお聞きしています。

当方(JA)のスーパーでも、少し地元産品を扱わせていただいています。島外から来た人はほぼ島のものが手に入らないという状態があるとお聞きしているので、どういった需要があるのか、どういったことができるのかということをいろいろ検討して、対応していきたいと思っています。

それから、先ほど、水産業で行くのか、農業で行くのか、という話が出ましたけれども、長い目で見た場合に農業人口は確かに減っては行くんですけど、集約してくると思います。そのための施設として、製糖工場もそうですが、今整備しているライスセンターなどは、10年、20年、農業を支える基盤となります

ので、あとはそういった農家の育成、残っていく農家というのは間違いなく規模を拡大して、集約して本当に強い農家を作っていく必要があると思います。

会長 今DXとか、スマート農業とか、いろんな取組がありますが、全て機械化できるというわけでもないでしょうし、どっかで補い合う部分も出てくるでしょう。また共存していかなければいけないということもあると思います。それぞれの場面で、それぞれ適した方法で強い農家を作っていくということも考えなければならぬのかなと思います。

会長 今日が初めての協議会なんですけど、結局、お聞きしている限りでは、島内の野菜、魚が手に入りやすいという状況のようですね。こういうものを1つのテーマとして、この協議会で揉んで、状況の改善に向けて、計画的に取り組んでいく。広報などについても、予算措置していただいて、効果的に働きかけていく。

この協議会は今後継続して開催していくものですから、計画立てて、実施してみて、半年後に成果を評価して改善に繋げていく。具体的な数字を挙げつつ、ぜひ、そういった方向でやっていった方がいいんじゃないでしょうか。

会長 では、時間も残り少なくなってきましたので、この話題については、この辺りで締めさせていただきます。

議題「その他」として4件ほど上がっていますので、事務局からご説明をお願いします。

名嘉文 企画財政課長の名嘉でございます。私の方から現在、村の方で計画をしているもの、あるいは目指そうとしている方向性というところを、情報共有を含めて4本ほど説明させていただきます。

① 若者未来会議 資料5 若者未来会議の概要

- ・当会議は、第5次総計の冊子107頁「施策3 女性が輝き、若者が活躍する島づくり」の中の「地域のリーダーを育成する『若者未来会議』(仮称)の設置」(108ページ)に基づくもの
- ・45歳以下の皆さんに声掛け。4月以降、議論を重ねている。賛同者は農畜水産業、宿泊・サービス業等々から23・4名。
- ・活動目的は「開かれた議論の場」「人材育成」「実践的取組活動の推進」「共創・協働体制の構築」
- ・9月15日に設立総会を開催し、会長選出を行ったところ
- ・会長は、本協議会の委員もされておられる商工会の金城正人青年部長
- ・現在、会長の方で各役員の指名に向けて調整中
- ・今後この若者未来会議で議論されたことを、本協議会に上程し、皆さんと議論し、方向性の確認ができればいいのかなという風に考えている

② 特定地域づくり事業協同組合制度 資料6 特定地域づくり事業協同組合制度 等

- ・第5次総計の冊子70頁「各種協同組合等新たな制度の導入」の中に規定
- ・人手不足の解決と雇用環境の整備等を解決する手法の一つ
- ・島内4事業者以上で組織する協同組合で、組合が職員を正規職員として雇用し、事業者へ派遣することができる
- ・11月6日に、中小企業団体中央会、沖縄県地域離島課から説明を受講
- ・鹿児島県の奄美地方では比較的導入が進んでいる。沖縄では、宮古島市が導入済み
- ・伊平屋版の協同組合の導入に向けて検討を始めたところ

③ 観光DXの推進 資料7 伊平屋フェリーオンライン予約購入システムの整備にかかる設計開発業務

- ・フェリーの乗船予約等については、現在アナログでの取り扱いであるところ、近年、急な車両搬送等の場合、フェリーに空きがあっても諸々の状況予約ができない等、様々な課題点が顕在化してきた。加えて、現金の取り扱いも事務的に大きな負担となっているところ
- ・オンライン化することにより、これらの課題の解決を図ると同時に、顧客サービスの向上を図りたい
- ・フェリー予約のみならず、宿泊、島内移動手段(レンタカー)などとの連携も図ることで、顧客利便性を格段に向上させると同時に、消費の機会ロスといった問題の解消、来島者による消費額アップにも繋げていけるものと思料
- ・こちらについても、皆様のご意見も拝聴しながら、具体的にどうやって行くかというところを考えてまいりたい

④ 米崎公園の活用 資料8 米崎海岸公園滞在型観光創出事業

- ・米崎については、北部振興事業で護岸改修事業などを行っているが、今後5年かけてキャンプ施設の機能強化を図っていく所存
- ・27度線モニュメント広場から米崎キャンプ場管理棟までの間の雑木林エリアに民間企業がラグジュアリーツーリズム、客単価を大きく上げるような施設を整備したいという提案を受けている
- ・資料は、国の補助事業を活用した場合の事業スキーム
- ・来年3・4月にかけて、外国クルーズ船が伊平屋に寄港予定。米崎沖合に停泊、テンドーボートで上陸し、夕方まで伊平屋観光を楽しみ、また船に戻っていく
- ・また、6月には、日本のクルーズ船が前泊港に寄港するという構想もある
- ・こういう新たな動きを大きなチャンスと捉え、若者未来会議でも議論してもらっている
- ・例えば、ウェルカムパーティーを米崎で開催して、1食5万円の伊平屋バーベキューセットとかを作ってクルーズで訪れた皆さんに美味しい地元の食材を提供するとか
- ・先ほどから話題に出ている10倍の価値をつけて外に売っていくという域内循環向上につなげたい。例えば、伊勢海老4000円で売のを、この方々向けに付加価値をつけて1万円で販売するというようなことが可能ではないか
- ・現在、若者からもいろいろアイデアを募っているところ
- ・そういった皆さんをリピーターとして、島で持続的にゲットしたいという視点に立った場合、素泊まり1泊2〜3万の宿泊施設を民間の方に建ててもらい、運用とか、食材とか、サービスの提供は地元の皆さんでやっていきたいという提案を受けている
- ・ヴィラなどの施設整備を民間の方にやってもらって、彼らは客の予約と移送をメインでやってもらう。地元を主体に伊平屋未来づくり協議会(仮称)を組織して、食、文化、体験などをこの方々に提供する仕組み
- ・これによって、村により多くお金が落ちていく仕組みを作りたい
- ・民間が投資するので、村には固定資産税等の税収も見込める
- ・国内企業になるが、そういった島外からのアプローチがあることから、情報共有させていただく
- ・伊平屋を取り巻く環境でいえば、やんばるの世界自然遺産登録、また、今帰仁の旧嵐山ゴルフ場にテーマパークが2年後に開園する。北部地域への世界の耳目が集まりつつある中、こうした動きをうまく取り込んでいくことが大事
- ・オーバーツーリズムにならないよう留意しつつ、客単価を上げていくという視点も必要だろう

会長 ありがとうございます。

ただいまのご説明に関し、ご質問等ございますか

- 是枝 今の4番目の話題で、「借地」と書いてありますが、地料はいくらぐらいになりますか。年間の借地料とかのお話はもうついているのですか
- 名嘉文 借地料に関しては、不動産鑑定入れますと、1㎡販売価格の6%が年間の借地料になります。約10年で売るよりも借地料の方が上回るという試算になります。10年単位の借地契約ということで今検討しています。
- 是枝 こういうものを建てる場合、宿泊施設の方ですとか、住民の意見とかが必要になってくると思います。お話を聞きまして私が気になったのは、先ほど10倍の価格をつけて何か売ることに対しては多分村民がついていけないのではないかとことです。宿泊不足というのは大きな問題だということは承知しておりますし、価格帯を上げるという意味でいったら、私のビジネスにとっても非常にありがたい話ではあります。しかし、いきなり10倍にしてサービスが伴うのかと言うと、これは非常に難しいと思います。今日はもう時間もあまりないと思いますので、また、次回以降しっかりと議論したいと思います。
- それから、もう1つ気になっているのは、この建物所有者の(株)ブロードエッジアドバイザーズさんというのは、こないだ企業版ふるさと納税で7000万伊平屋村に入れられた企業ですよ。この事業者選定というのはどのようにして選定されたのかということです。
- 名嘉文 こちらは先ほどご説明を差し上げた通り、事業者からそういう提案が来ているということです。
- 是枝 何事も色々ゆっくり考えた方がいいと思います。若者未来会議とか、そういった場で議論され、こういった提案をどんどん取り入れていくべし、という結論が出れば、それはそれで海人も生活があるのでいいと思いますが、私もまたじっくり皆さんと議論していきたいと思います。
- 石原 どうしても経済は、住民の生活、暮らしが中心となっていく。とりわけ、将来を担う若者の将来の生活も考えていく必要があるということで、そうなると、先ほど説明があった若者未来会議みたいな場、どう人材を育てていくかということを考えなきゃいけない。この協議会は、まさに林先生が座長でいるわけですから、その大きな歯車をこの委員会で回していけるような仕掛けができないかなというふうに思っています。
- どんなに行政が頑張っても手を打とうが、若い人が育って行かないとそれが生きてこないですよ。これをどう作るかだと思います。そういう意味ではもっと横断的な仕掛けが必要なのかなというふうには正直言って感じています。
- 会長 今ご報告いただいた4件というのは、情報提供ということですので、改めて具体的な動きが出てきた段階、何か決定する時には、またこの場でご議論いただけるということでしたのでどうぞよろしく願いしたいと思います。
- それでは時間になりましたので本日の会議はこら辺で終わりにしたいと思います。本日は長時間にわたり活発な意見交換ありがとうございました。